

解答

- 問一 ① 作るのに三万円かかった特攻機。
② 搭乗員もろとも敵機に激突する特攻機は、「遺体の入れ物」である棺桶と同じ役割を果たしていると言えるから。
- 問二 息子が死んでしまったことは、辛くて悲しくて、とても納得のできるものではない。しかし、戦時下においては、息子の死を嘆き悲しむことも息子を死に至らしめた国に怒りをぶつけることもできない。「戦争だからしかたがない」と自分を無理に納得させることで、感情を押さえ込もうと思ったから。
- 問三 伍長の乗っていた飛行機が不時着したときに、アガリヌヤーのおじいさんが必死に手入れして育てていたウムの畑を飛行機の機体で押しつぶし、見る影もなく荒らしてしまったこと。
- 問四 伍長の胸に揺れる人形は、挺身隊の女学生たちが、特攻の成功を祈りながら作ってくれたものである。女学生たちに悪意がなくとも、特攻の成功が死を意味するものである以上、伍長の死を願う思いが人形にはこめられていることになるから。
- 問五 特攻隊の飛行機が敵機に見つかったときにどれも沖に飛んでいったのは、島に被害を与えないようにするためではなく、緑色の翼を敵機から見えにくくして自分の身を守るための行動だったということ。
- 問六 特攻兵は自分の命などものともせず島を守ってくれる、神さまのように絶対的な存在だと思っていた。しかし、特攻の失敗を嘆きながら取り乱したり、カミの優しさに触れて感極まってわらいだしたりする、伍長の感情豊かな面を見た。また、わらったことで緊張のゆるんだ伍長の、「生きてよかった」という本心のつぶやきを聞いたことで、伍長が自分たちと同じ人間だと感じたから。
- 問七 耕〔された〕 火種 幼〔く〕

困〔む〕

鏡

未熟